

## 明治における国家と個人（承前）：石川啄木の場合

西尾，陽太郎

<https://doi.org/10.15017/2331280>

---

出版情報：史淵. 81, pp.93-116, 1960-05-15. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：



## 明治における国家と個人（承前）

——石川啄木の場合——

西 尾 陽 太 郎

一

「樗牛に目をさまして」、樗牛を精神上の恩師と感じながら、二十八才の短い生涯を近代個我の解放のために燃やしつくしたのが石川啄木であつた。彼の短歌は余りにもわれわれに親しく、そのために彼は多感な青年詩人としてのみ扱われ易いけれども、その文学的活動の大半は、彼の日記・書簡・評論を通して見る時、却つて明治中期以後の思想史上の、最も果敢な且つ痛ましい存在に相違ない。彼の貧苦との闘いの一生は、同時に文学上・思想上の闘いの連続でもあつた。文学者・新聞記者・小学校教師の生活を通じて、彼は自己解放のための精神革命を試み、国家権力に対する批判を深め、終に社会主義に自己の進路を見出した。啄木は「明治における国家と個人」を考える上での、典型的思想家たるを失わない。

いま、彼の思想的生涯を前期明治三十五年（十八才）から四十年（二十三才）までと、後期四十三年（二十六才）から四十五年（二十八才）までとして考えて見たい。二十四・五才に相当する明治四十一・二年は前期から後期への転換的な時期と見るが、同時に彼の自然主義の時代、北海道における新聞記者の時代で、単なる過渡期ではない。

前期における思想的特徴は、著しいロマンチズム・芸術至上主義・天才主義・理想主義であり、それらのイデオロギ―の具現者としての「詩人」意識が、ワグネルの人生観によつて支えられている。三十六・七年頃の詩を集め、三十八年に完成した処女出版「あこがれ」は、その文学的結晶である。この時期の彼は自ら詩神の奴隷なりと称し、詩は彼の生命であり宗教であるとしていた。これは彼の当時の人生観、「人間の価値はその宇宙的存在の価値の自覚にあり」、「人類天賦の使命は自己の使命に精進することによつて、既成社会に左右されずに自己理想郷を建設することにある」という思想に基いている。（日記三十五年秋融笛語）したがつて彼は芸術上の問題自体としては芸術至上主義を掲げているが、人生観の乃至哲学的意味においては、詩人を以つて世俗社会の批判者なりとした。中学校をストライキ事件で退学したのち上京した彼の三十五年十一月九日の日記に「如何なる者も社会の一員として大いに奮闘」すべきであり、「人の値は大なる戦に雄々しく勝ち、もしくは雄々しく敗くる時に定まる」といい、十一月十五日の書簡の中では「胸に詩才を掩いかぬるものは、何時の世でも俗悪なる社会と戦うべき宿世をもつてゐる」といつてゐる。そしてこうした彼の自負を支えたのは、ユニオン会の友人たちの友情と愛人節子であつた。節子もまた「理想の国は詩の国にして、理想の民は詩人なり、狭きアジアの道を超えて、たたん曠世の詩才君ならずして、誰が手にあらん」と啄木をあげましている。（秋融笛語一、三〇）而してこの現実との戦の目標は、当然個人主義の拡張にあつた。詩人として最も自己に忠実なる者は、やがて他の人にも忠実の人であると彼はいい、（三六、九、一七、書簡）しかも彼はこの自我の拡張が、愛による自他の融合の自覚にまで到達すべきであると考えた。三十五年の上京に際して彼は先輩から透谷全集を贈られて居り、その思想的影響が可成りあると考えてよいが、一面樗牛の思想からは超人主義、天才主義をうけつぎ、更に樗牛の死後は、姉崎嘲風を慕つて、ニ―チェの思想からワグネルの愛の思想に傾きつつあつた。この傾向は三十七年二月、彼が病氣のため浜民村に帰つてから急激に昂まり、八月頃には彼が「人格的宗教」とよぶものにまでなつてゐる。八月三日の書簡によれば、人間の中に万物の

根源なる靈智の意志と愛との内在を自覺し、その自覺を人格に體現して、真人即ち人において現われたる神にまで到達するために、天与の事業に奮闘せねばならぬといつてゐる。其処に透谷的な實在的靈智の思想、人に於て神を見る樗牛の超人の思想、及び嘲風を通してのワグネル的愛の思想が、彼の人生哲学を構成している事が知られる。愛について彼は、男女を問わず、まことの友の愛こそ永遠なる生命なりといい、また、神は先づ人と人との愛によつて永遠に入る門を開くというように考えており、樗牛やニーチェの超人思想による現実超越の孤高性にのみ留まらずに、愛による生命感のひろがり求めている。しかもこの自己拡張の意志と人間結合の愛との二元的關係は、彼自身の統一が不十分であつたようで、この思想は、更に三十九年二度目の上京に失敗し、洪民小学校代用教員時代に入つた三月二十日に更に考察を加え、彼自身の理解を明確にしている。即ち、一般人間の性情における自己發展と自己融合の要求を、宇宙の二大根元的なものと考え、それは一見矛盾の如く見えながら宇宙の意志の二面をなすもの、愛といわば自己融合の意志に他ならぬとした。そしてこの理解あつてはじめて、彼の二十年間の精神生活の意義が見出され、彼独自の個人主義の基礎ができたといつてゐる。(日記)ここに彼のヒューマニズムの立脚点がありとすれば、ここに彼の、後期における社会主義への転向の可能性を考えてもよいかもしれない。

## 二

それ故こうした樂觀論に立つかぎり、彼の世俗社会との苦闘も、ついには来るべき調和と光明の世界への到達を疑わしめるものではなかつた。第一回の上京による經濟的破綻と、それにひきつづく故郷での病臥生活、第二回目の上京において「あこがれ」を出版し、再び窮乏の結果小学校教員生活に入り、一方彼の病氣が原因となつた、彼の父の住持職からの追放問題という、現実生活の悲惨な状態の中で、彼は凡てのものの意義と価値とに疑惑を抱き、幾度かは自殺を思いなが

らも、ついに「我」の存在のみは疑わず、「我」を信ずる事がやがてこれをおしひろめて「我」と同じ人間なる、凡ての「人」を信じ得べき理由となつて彼を支えているのである。しかも彼はこの時期に、日露戦争の経験による詩人としての使命感によつて奮い立たせられた。日露開戦の三十七年二月十日、彼は東西思潮の接触、浩洋として四海に迫るの日、文明の一大転機漸く動き来る事を考えており、その直後に開戦の号外を見て「日東詩美の国、未だ滔天の覇氣死せず」という。（野村長一宛書簡）そして前述の八月三日の宗教観の後にも、日本文学の新生命は吾らの肩にあり、東西を融合した世界的文学は、今後吾らによつて建設されるとのべ、国語の貧弱を救うための新しい試みについて語つてゐる。

したがつて、彼が戦争に期待したものは、軍事上の戦勝ではなく、戦後の国民の文化的使命についてであり、（浜民村より）国民意識の高調の中における全一の調和に基く文化の根本的な発達の希望と、「愛と意志」の人生における意義を拡張した民族的理想の發揮であつた。それは日清戦争時における内村鑑三の戦争観に共通している。それ故彼は世上一般の戦勝気分に対しては極めて批判的な態度に終始した。既に三十七年、「浜民村より」の中で、彼は政治と文化との関係について、良好なる政治活動とは、国民の思潮を誘導し、個人の権威と創造事業を尊重して、文化の充実をはかり、自由と平和とを作成する政治であり、かかる政治は、そのような理想を抱いた政治的天才の出現にまつ他なしといつていた。それだけに現実の戦勝気分と政治の状態は彼を失望させたのであつて、三十九年の「古酒新酒」では、軍事の他には我が大和民族が、まだ決して大なる国民であり得ない事を悲しんでおり、四十年の「林中書」に到れば、「今日の日本は哀れなる日本、世界一の強い兵隊を有つより他に誇るべき文化のない日本」といい、富国強兵は国家生活の予備条件にすぎず、また、物質的文化は機械尊重の生活的利便にすぎないとし、日本国民については、民衆は依然封建の民、官力と金力とにすぎざる無智の民、個人の自由なく権利のない、非立憲的国民にすぎぬという。「日本は今立憲国である。然し此の立憲国の何処の隅に真の立憲的な社会があるか、真に立憲的な行動が幾度吾人の前に演ぜられたか」。この調子には樗牛的なも

の、そして更に平民新聞的なものへの傾向が明かにうかがわれる。

それはともかく、この現実批判の立場から、三十九年の啄木にもつとも大きな課題となつたものは、近代的自我の確立の典型的形態としての天才主義の主張である。偉大なそして真にめざめた天才的個性こそが、日本のもつ使命の指導者でなければならぬ。戦後の社会の資本主義的な俗悪さ、「世界をあげて生命なき物質の集団たる今の時に対して」、詩人としての使命感に迫られるが故に、彼は浜民村小学校代用教員生活に熱中する。彼は自己の中学生々活の体験からしても、当時の教育に対しては極めて批判的であつた。日本の教育は凡人教育であり、天才を殺す断頭台である。日本の教育は教育のミイラに過ぎぬ。教育の最高目的は天才を養成して、歴史に意義ある人物を作る事、第二の目的は、かかる人生の司配者を尊敬する健全なる民衆を育てることである。総じて教育の目的は智識を授ける事でなく、人間を作る事にあり、学校教育こそ教育の「足」なるが故に、「ミイラ」に息を吹込むために、彼自身が小学校代用教員、月給八円の、しかも日本一の代用教員たる事を誇りとした。「詩人は最良の教師なり」と自任した彼の熱意によつて、彼は全校児童の崇拜的となり「小王国」を出現した。

### 三

しかし、かかる熱意の中にも彼の現実の境遇は彼の中に次第に不満を大きくして行つた。献身的な努力に対して酬られるものは、一家五人の生活を支えるに到底足りない八円の月給であり、それすら滞り勝ちという不合理、彼自身の詩人としての能力が発揮できない不満、これに加えて浜民村民は彼を「由井正雪」と呼び、彼の才能に対して敵意を抱き、俗悪な陰謀によつて彼を「公金消費」の名で訴えるまでに到つている。この社会の不合理、彼の個性を圧殺しようとする俗悪な環境の中で、彼の楽天的な人生観は動揺し、現実に対する反抗的な姿勢は、彼を社会主義の方へ傾かせる。「貧の辛

さがヒシヒシと骨に沁む……時々抑へきれぬ不快な謀反心に駆られるのは、つまり糧を与えられぬ自分の精神が、飢の苦しみにたへかねて暴動を敢へてするのであらうか」（日記三九、三、二七）「人生に對する予の不平は日々に益々多し。生活の苦闘も日に甚し」（書簡三九、五、一一）故郷の自然を愛し、小児の天真を愛した彼は、資本主義的な文明を故郷の自然を汚し、素朴な農民を墮落させ、人間性を殺してゆく暴力として憤りを感じている。三月二十日、彼は社会党の東京市電運賃値上反対の市民暴動について次のようにいう。「余は社会主義者となるには余りに個人の權威を重んじている。さればといつて専制的な利己主義者となるには余りに同情と涙に富んでいる」。そして前掲の、宇宙の意志についての二面性を考察してのち、「自分が所詮自分一人の意味における個人主義者で、社会主義を初め、世上凡百の思想に賛成する能はざるものは実にこの立脚点に立つからである」といつている。この点から察するに、彼の社会主義に對する理解は、まだ当時一般の常識の範囲を出ないもので、キリスト教社会主義的なもの、彼がトルストイの思想について批評している言葉、「凡ての人が暴力に服従するを要せざる時代であるが、凡ての人が意志を放棄して平等の天蓋の下に集る社会」、消極的な博愛思想による「弱者の道理」と同様なものと考えているのであらう。しかも現実社会の矛盾に對して立ち上りつつある「社会党」の動きに對して、彼は今や心をひかれざるを得なくなつて来る。三月二十日の日記はその心的動揺を示すものである。「朝目をさました時から社会主義について熟々考へた。そして殆んど迷つてゐた。午後四時頃駅内に火事あり……勇ましく美しい火を見て立つてゐた時、予は不図心で呟いた、然し賛成する事は出来ぬ、何に、社会主義に」。

燃え上る炎の美しさにみとれながらも、その暴力主義に對して反省するものがあつたのは、彼の個人主義の中の愛の意志が彼に存在するからである。彼の愛の理想は代用教員生活において著しい成果をあげ、彼の愛に應ずる兒童の純真さと、そのめざましい自治自由の氣風に對して彼は「喰らいつきたい程可愛い」といつており、この時期にはしきりに小兒

の心の尊さをいつている。「世に尊きもの三つあり、一に曰く小児心、二に曰く小児心、三に曰く小児の心、ああ生れたるままにて死ぬる人こそ、この世にて一番エラキ人なるべけれ」。(一握の砂) 理想的人間像とは、彼にとつては小児のままの純真と自由を成人に見る事なのであり、世俗における人間のみにくさは、この小児の心を圧殺する社会悪によつて生ずるのであるから、これに對して叛逆せねばならぬ。「吾等何故に赤裸々たる能はざるか、公明なる能はざるか、天真なる能はざるか、大なる声にて物をいふ能はざるか、行かむとして行き為さむとして為し、心のままに笑ひ又泣く能はざるか。その理あるなし。然らば正に叛逆の児たらざるべからざる也。永なへに真にして且つ美なる自然のために、憎むべき叛逆を企てつつある人類に向つて、吾等の正しき叛逆は最も勇敢に戦はれざるべからず」。

この啄木の、一種の自然主義ともいふべきものは、それ自体は彼のロマンチックな理想主義の基調であり得るが、同時に文芸上の自然主義へ発展し得るものであり、更に現実社会の資本主義的暴力に向けられた時、社会主義的啓蒙性を有つものでもあることが注意されなければならぬ。三十九年から四十年四月まで、彼の浜民小学校時代は、以上のような思索の展開を示して來た。

#### 四

明治四十年五月四日、一家離散の形で家族を知人に托した彼は、函館の小学校に行き、かたわら函館日々新聞の遊軍記者となる。しかし九月には函館の大火があつて、十四日には札幌につき、北門新聞に入社したが更に、二十七日、小樽日報の創立に當つて、これに迎えられることになり、十月から野口雨情と共に三面記事を受持ち、一日十五時間働いて月給十二円貰つた。記者生活に入ろうとして文学への志は益々強まり、一方同県人小国露堂と相知つて、露堂から社会主義について教えられるところがあつた。「所謂社会主義は予の常に冷笑するところ、しかも小国君のいふ所に見識あり雅量あ

り。或意味に於て賛同し得ざるにあらず、社会主義は要するに低き問題なり。しかも必然の要求によつて起れるものなりとは、此の夜の議論の相一致せる所なりき。」（丁未日誌・四〇、九、二一）しかし十二月二十八日西川光二郎らが社会主義演説会のために小樽に來たが、啄木は誘われながら行かず、非国家主義、個人解放を天職と感じ、個人解放史の構想を練るなどして、彼の心境はまだ決まらなかつた。

だが既に中学校時代をストライキによつて退学し、新詩社に入つて短歌の革新に志して新しい形式を生み出し、亦庶民の代用教員時代には生徒の自治活動に成功し、辞職に際して凡俗な校長排斥のストライキをまきおこして、生徒に即製の革命歌をうたわせ、更に小樽日報の人事に關して、共和制を布く意図の下に社内内の廓清を試みて殆んど成功した彼である。その自己の職場におけるそれぞれの小革命が、自由のための封建的俗惡との対決であつたにせよ、それが現実社会の矛盾への抵抗である限り、今や上述の彼自身の経済的窮迫による矛盾、資本主義的暴力による社会の俗惡化への憤りを抱く彼にとつて、その抵抗感が社会主義への誘いにならぬはずはない。即ち四十一年正月、彼は小樽日報廓清が最後の一步に於て挫折したために辞職し、小樽花園町の借家で窮乏の正月を迎えているが、その元旦の感慨は明かに社会主義的な傾斜を示している。「一人前の働きをして、何一つ悪い事せぬ主人自身」がその労働に対する報酬の不当なる故に借金云々いわけをせねばならぬという屈辱と矛盾とを、「此のおどろくべき不条理はどこからくるか、社会組織がわるいからだ、悪社会はどうすればよいか、外に仕方がない、破壊して了はなければならぬ。破壊だ、破壊の外に何がある」と日記に書きつけているのである。そして四日には前回にはゆかなかつた社会主義演説会に出向き、西川の「何故に困るものが殖えるか」などの演説をきいて、「要するに社会主義は、予の所謂長き解放運動の中の一齣である。……そして最も眼前の急に迫れる緊急問題である」と、自己の思想との關聯において受取り、更に「この運動は前代の種々な解放運動の後をうけて、労働者即最下級の人民を資本家から解放して本来の自由を与へんとする運動で」とあるという理解にまで到つてゐる。

(日記四一、一、四)ただ彼としてはその解放は単に労働者の資本家からの解放にとどまらず、「一切の人間を生活の不条理なる苦痛から解放することを理想とする」という立場があり、そこに彼の社会主義への理解が、まだ個人主義的なものとの関聯つけられているけれども、彼の生活体験がいまや彼を新しい方向にふみ切らせていることは明白である。一月九日には小国露堂と社会主義について、革命と個人解放とを大いに談じているのも、労働者の解放をいう露堂と、それを拡大して個人の解放を目的とする啄木との論争であると思われる。(日記四一、一、九)

こうして彼は思想上にも転換期に入るが、同時に小樽をはなれて釧路に赴くことになる。四十一年一月十三日釧路新聞の白石社長から招かれて彼は十九日に出発した。白石社長は河野広中と共に活躍して獄にもつながれた人であり、自由主義を説いた「真理実行論」の著者でもあり、革命思想について啄木と肝胆相照らすところがあつた。新築の新聞社であつた事も啄木をよこばせ、毎日一頁以上もの記事を書き上げるといふ活躍ぶりであつた。(書簡四一、一、三〇金田一宛)

彼の論説の一二について見れば、着任早々の一月二十六日には婦人会の席上「新時代の婦人」という題の下で、イギリスにおける婦人参政権運動よりはじめて、我國の婦人の社会的事業への貢献を強調し、婦人の個人主義的自覚と政治上の権利など、婦人の地位向上について述べ、二月には「予算通過と国民の覚悟」と題して六億予算の通過によつて、却つて現内閣が国民の興望を失い、今の政府が軍部の手先となつて国民を奴隸化しつつある事を指摘し、政府に盲従する偽愛国主義を否定し、国民全体を背税に苦しめてまで軍備の完成を急ぐ帝国主義について国民の覚醒を喚起した。のみならず啄木は社外の活動においても計画する所多く、青年町民の団結、教育機関の拡張、図書館の設置、釧路港の改築、アイヌの研究などを考えており、第三小学校の廓清にも既に着手しはじめていた。それ故彼は忽ちこの地の名士となり、その生活は料理屋に過される事が多く、小奴其他の芸妓に取りまかれる日が重つている。

## 五

しかるにこうした生活の中で、彼は現実暴露の悲哀と激しい虚無感に襲われている。二月八日宮崎大四郎宛の書簡は、前半に以上のごとき彼の生活を書きながら、後半では、個性論者として自己を支配し、自己の思想によつてあくまで自己の力を発揮すべき彼自身が、この現実の環境の中で見失われ、従来の理想が結局自己中心的な「ライフィリユーション」に過ぎず、眞の自己は結局空なる人間であり、一人ポッチの寂寞の中で、虚無の前に立たされているという。「ア、一切の心の虚飾を去つた眞実暴露の悲哀、此の悲哀は泣く様なやさしいものではない」。そしてこの虚無の思想の文学に表現されたものが自然主義であり、自然主義は人間の意志の否定であり、本能のままに流れてゆく人の姿に他ならない。「君、實際現在の僕の底の底の思想程、明白な赤裸々な思想はないだらう。僕は無宗教だ、うまいものは喰ふべく、うまい酒はのむべし：本然の要求に基く肉慾の如きも決して罪惡でも何でもない：婦人の貞操の如きはまるで根拠のない事だ。」「恐らくそれは思想というよりも、彼の追いつめられた生活的絶望の反映であるというべきであらうが、とにかくここまで来て啄木はいわゆる過去のロマンチズムや理想主義から脱却して、自然主義的な心境に到り、この立場で自己を見つめ出しているのである。彼の思想的飛躍のための大切な脱皮期がはじまつたといえる。二月に新聞に掲載した評論「卓上一枝」には、「どうにかなる」という考えが、人間の有する一切の知識中の最大の思想であるという、メーテルリンクの言葉をテーマとして、ライフィリユーションを虚偽とし、その幻影を失う時の現実暴露の悲しみを語り、自然主義とは我の中に自然の我を見んとするものであり、この立場から人生社会の一切の虚偽を打破せんとするものであるという。自己の体験を通じての当時の自然主義文学への発言がなされ初めているのを見る。しかるに一面社会を見る時「我が耳革命の声をきき、我が耳革命の声をきき、我が目革命の血を見る。人は自然に叛逆す、我等は人に叛逆を企むべきのみ」と、

自然に背き、真と美に背く社会に対して強い責任を感じている。そしてこの二面の矛盾が解決できないままに、彼は突如四月五日に釧路を去つて上京した。

今や彼には前期のロマンチズム、詩人としての使命観、個我的思想などが崩壊してゆきつつあり、しかも自然主義的な人生の現実に対して、如何に自己を位置づけるかの方向は見出されていないのであつて、この二面はどこまでも矛盾として交叉する、縦横の二線として感ぜられている。四月二十二日大島経男宛の手紙の中で、彼は自身を人生の落伍者、身も心も宇宙の浮浪者とよび、狂的な自暴自棄に駆られている事を訴え、人生について、「之を横に見れば人生は際限なき平面、未解決の血の海であつて、これから云へば人生の結論は虚無、人生を縦に見る時は、人生は初めあり終りあり、個人解放の時代が彼の最後の理想である」という。そしてこの縦と横とは何処までも一致しない矛盾であるが、その交叉点に立つて彼は現状打破の革命（盲動）を欲するといつてゐる。

このような人生観的な転換と混乱とは、一面彼の文学への志向と現実生活の矛盾を反映するものでもあり、亦文学への態度の転換をも意味してゐるであろう。自暴自棄の中にも当時の彼の最大の希望を「専念創作に従う」ことのみであるといつてゐるのであるし、またそれは詩から散文への彼の転換を伴う問題であつた。上京後五月七日森鷗外宛の手紙の中で、「私の心は今：詩歌の故郷を旅立ちて、散文の自由の国土にあこがれ居候」といつてゐる。何故に彼が詩をすてようとしたか、それは一つには、彼の属する新詩社が衰えて来て、それに属することによつて却つて生活上の困難が予想された事、彼の文学者としての最後の試みとして、北海道時代の体験から、自然主義的、散文的傾向が彼の中に芽生え、それを表現したい意欲にかられた事、上京後先輩の言によつて小説創作による生活の見通しが考えられた事等の外面的な理由がある。しかし上述の関係からするならば、散文への試みは彼自身の現状打破の革命が試みられたものといつてよい。六月二十九日には詩について「一意専念、囚はれたる空想より脱却し、最も大胆に自由自在に歌ふべき事」を小田島に対し

ですすめているが、この囚われたる空想こそ、彼の「あこがれ」時代のロマンチズムを指して居り、この囚われた空想から、散文の「自由の園」への彼の歩みこそが、当時の彼の内的革命であつたといつてよい。

また七月に入つての彼の書簡には短歌が叙景とか叙事の趣味にある中はだめであり、複雑な近代的情緒の瞬間的刹那的の影を歌うに適した詩形としてのみ、多少の価値をみとめるといい、詩歌の技巧格調の制約が如何にしても遊戯的分子を有つために、真に近代的情緒の表現たるに足らぬ故に、彼が小説に向うに到つた事を語っている。そして一年後の四十二年七月になるとこの点について、一層明確に、自然主義文学の制作上の動機や精神に少しも遊戯的分子のない事を論じ、シルレルからハルトマンに至つて完成された、芸術の遊戯的動機論的美学が、近代にあてはまらぬ事を述べて、「これは近代文芸の発達とそれを誘起した我等の内的生活の革命に留意してゐるものの何人も否むことの出来ぬ所」という。（汗に濡れつつ）これは果して明治の自然主義全般について云得ることであるか否かは別として、むしろ彼の心境によつて強調された点があると考えてよく、この点やがて彼自身批判的になるが、とにかく今や彼は、無限の平面の血の海の中の自己表現こそ、文芸の新しい発足点と感じ、それに対して「天地人生に対して主観の色を以つて彩色し、空想の外套の中にかくれようとした」、曾つての自己の弱い心に阿つていた事が、過去の事としてふりかえられて来ているのである。

## 六

四十一年四月の上京から四十二年十一月の「食ふべき詩」を出す頃までの啄木はほぼ以上の如き決意の下にあり、それは彼の文学的生活の中での、制約された詩から自由な散文への、彼の内面的革命を意味する行為であつた。したがつて、この間における創作上の努力は極めて大きく、四十一年五月に「菊池君」・「病院の窓」・「天鷲絨」を書きながら、一方、新詩社附屬的な短歌会である金星会の短歌の添削をし、評論「北海の三都」を書き、六月に入つて、「二筋の血」や散文

詩「曠野」・「白い鳥」・「血の海」を作り、六月二十四日の夜には、一夜の中に一二〇首、その翌日は一四〇首の短歌をよんで、これが後に「一握の砂」として発表される事になる。次いで七月に、「刑余の叔父」を書き、八月には明星が廃刊を決定して、新しい雑誌を計画する事になり、九月には「空中書」や「日曜通信」を書き、十月には「鳥影」に筆を加えて十一月から東京毎日に連載、一方新短歌雑誌「スバル」を計画し、翌年一月には彼が名義人となつて創刊した。尚お、二月には朝日新聞に入社することになり、評論として「樗牛死後」・「一握の砂」・「胃弱通信」・「汗に濡れつつ」・「百回通信」を書いてゐる。

しかし、こうした彼の努力の反面に、彼の苦惱は一層酷しさを増した。彼の創作は世間から殆んど認められず、収入としては殆んどなかつた。質入れと友人の同情にすがる飢餓の生活の中で、故郷の父母妻子への心遣いと創作上の苦心が重つて彼を苦しめた。その中で四十一年六月十五日には川上眉山の自殺、六月二十三日には国木田独歩の死が報ぜられ、彼の心をゆりうごかす。眉山については、彼はとりのこされた作家の最も深刻な悲哀であるとして他人事とは思えないと云つており、独歩については、十年間みとめられず、認められて三年にして死んだ、真の作家中の作家と呼んでいるが、そのどちらにも自己に対する歎声がかめられている。そして「ああ死なうか、田舎にかくれようか：何時になつたら自分は心安く其日を送ることが出来るであらうか」（四一、六、二七、日記）といい、この飢餓と死の誘惑のドン底生活の中で、文学や人生の価値に対する根本的な懷疑と虚無感が彼の生活を支配すると同時に、そこから次第にデカダンス的生活行動が著しく、四十二年四月以後六月までのローマ字日記は、その最も悲惨な生活記録である。彼は神も靈魂も認めず人間はついに動物にすぎぬと叫びながら、一方にはまた強いロマンチズムや過去への追憶を辿り、更に死の誘惑によつて、幾度か剃刀を体に当てながらも、ついに生存慾に敗けて死にきれずに、「ただ盲動あるのみ」といいながら人生の真面目について語り、自然主義に対する批判の中に新しいロマンチズムを探索するなど、極端な自己分裂を示している。

散文の自由の国への最後の試みは失敗した。彼は「一年間の苦しい努力の全く空しかった事を認め」、「遂にドン底に落ちた、斯ういふ言葉を心の底から言はねばならぬ事になった」。(司町より) しかし以上のような懷疑も虚無も自己分裂もいかえればロマンチストとしての啄木が墜ちてゆく苦しみ到他ならず、そうした意義のあり方自体は決して墮落といわれるようなものでもなければ、また自己喪失でもなく、却つて目ざめた彼の主体性の苦しみ到他ならぬ事はいうまでもないのである。「蠟は減りつくした。火が消えた。幾十日の間黒闇の中に体を投げ出していたような状態がすぎた。やがて其暗の中に自分の眼が暗さになれて来るのをじつと待つてゐるやうな状態も過ぎた」時、「全く異つた心持からものが言へるやうになつて来た」。(司町より) だから以上のような混乱の苦しみはいわば彼が前期的な天才主義的個人主義から、新しい途へ出発するための転換脱皮を果たすためのものであり、其処を経過して、芸術という偶像や詩人という名によるイリュージョンを打破つて、どこまでも人間、平凡なる目覚めた人間としての成長への彼の歩みがふみ出される事になる。

そうした彼の後期の初まりの直接的動機となつたものは、恐らく四十二年六月に家族を東京に迎えた事であり、これが彼の生活上の責任感と生理上の安定が彼の足を地につけさせることになつたと思われ、彼のローマ日記が六月までで終つてゐる事に關聯してゐる。そしてまたその現実的な態度を一層明確にならしめたものは、四十二年十月の末の節子の家出事件である。この衝動は極めて大きく、これから彼の思索も変化を示して来る。四十三年三月十三日、宮崎大四郎宛の書簡の中で彼は、「去年の秋の末に打撃をうけて以来、僕の思想は急激に変化した。僕の心は隅から隅までもとの僕ではなくなつた様に思はれた」といつてゐる。この四十二年十月から四十三年三月頃までの彼の生活上のモットーは「身心両面の生活の統一と徹底」ということにあり、現在の自己の生活を改善し、統一し、徹底することによつて自己を造るという、新しい個人主義だと彼はいつてゐる。(四三、一、九、大島経男宛書簡) 彼はこの書簡の中で、過去の自分を憐れな

る卑怯なる空想家とよび、自己の反抗精神は、単に正しい理を回避しての自己反逆にすぎなかつたと反省し、この反省から単に遠い理想のみを追わずに、自己の現在の生活を直視すると共に、人間のもつ可能性を信頼し、自己の個性を単にギブンファクトとしてのみ固定的に考えず、自己完成のために努力する事によつて、不満足だらけの現在の日本をも、この自己完成の道を通じての、日本人及び日本人の生活の改善の努力によつて救つてゆくべきであり、これに対してもつとも必要なるものは、単なる無反省な国家への反感でなく、人間の理性の權威の尊重であるという。

## 七

これらの彼の心境は、多分に人生觀であり、樗牛的な改良主義的色彩をもつものであるが、とにかくここには、從來彼に見られなかつた健康さ、現実直視、理性尊重、国家社会への切実な関心などが見られて来る。そしてかかる態度が、詩については四十二年十一月の「食うべき詩」の提唱となり、社会時評としては四十二年十月の「百回通信」や、四十三年二月の「性急なる思想」となつて表現されている。「食ふべき詩」とは兩足を地面にくつつけて歌う詩、実人生と何等間隔のない、日常の食事の如く、必要欠くべからざる詩である。文学における自然主義が、明治の日本人の最初の哲学の萌芽であるとする彼をして云わしむれば、食ふべき詩とは亦、自然主義的な詩ともいふべきものである。彼はこの主張において、詩を詩人という特種な階級の手から解放し、且つその表現において、封建的な時代語から解放して口語によることを主張する。かかる主張にはいろいろな意味がふくまれているのだ。第一には彼の前期における詩人としての誇り、天才意識という特権的な意識への深い反省がある。「天才」という、英雄主義的意識は彼を限りない理想主義に走らせ、却つて現実生活からの遊離と生活の破綻をひきおこし、彼をドン底にまで墮してしまつた。その特権意識や文学という偶像こそ、却つて詩を現実から無益なものにし、人間の現実の切実な且つ必要欠くべからざる自己表現の手段としての資格を見

失わせてしまうのである。詩において時代語が用いられ、口語詩がいやしめられるのは、詩が現実から遊離して、特殊な領域にのみ閉じこもるところから来る。しかしこのことは現実的に自己の判断を自己の責任において表現（実践）するに當つて、一種の卑怯なゴマカシと責任の回避となる。心に思うがままの表現ができないからであり、其処に不統一と不徹底がある。

第二には当時の自然主義に対する批判がある。自然主義を明治における日本人の哲学的思索の萌芽と考えた彼としては、その現実暴露によつて政治や社会の不合理に対する抵抗精神の表現としてこれを認めることができたとしても、自然主義文学の中には、そうした批判的立場から逸脱した無反省なデカダン趣味が多く、これに対して彼は強い反感を抱きつづけているのであり、そうしたデカダンは現実暴露というよりも、むしろ前記のような文学者という特権意識の中にとちこもつた、卑怯な無責任の態度から来る虚偽にすぎないとするのであつて、この考えは「性急な思想」の中にも説かれている。

第三には彼自身の生活の統一と徹底を單に彼自身のものとのみ考えず、直ちに日本人全体のものと考える立場が作用している。「我々の要求する詩は、現在の日本に生活し、現在の日本語を用い、現在の日本を了解しているところの日本人によつて歌はれた詩でなければならぬ」と彼はいう。この時の彼にとつて、「一切の文芸は他の一切のものと同じく、我等にとつて或意味に於て、自己及び自己の生活の手段であり、方法である」と考えられ、人間完成のための、民族の成長のための手段として、すべての文化形式が考えられているのである。

こうしてドン底生活に身をおき、文学者としての特権意識から解放され、亦、新聞記者としての政治経済社会への批判の眼がとぎすまされるにつれて、彼には一國民として日本人及び日本国への愛情が次第に昂められて来る。しかしその愛情は決して單なる感情的な妥協ではなく、あくまでその欠陥や不合理が批判追究され、改善統一が果されねばならぬので

あつて、國民たるものはその責任を回避することの許されぬものとして意識されている。四十三年一月九日の書簡の中で彼は、「既に我々は我々の現在のいかなる状態にあるかを知りました。この状態は決して満足すべきものではありません。我々は進んでこのやうな状態になつたところの原因を探究し、闡明し、而して更に創造者の如き勇氣を以つて、現在の生活を改善し統一し徹底させねばならぬではありませんまいか」という。かかる傾向が著しくなるのはやはり四十二年十月頃からである。即ち彼の社会時評「百回通信」中、永井荷風の著書に対する発売禁止事件以後である。この事件はその表面上の理由は、その文章の風俗壞乱のためとされるが、日露戦争後の社会には、社会主義運動の動きに対する思想的弾圧の中で、自然主義文学のもつ抵抗は亦この社会主義思想の外廓思想として注目されたのであつて、啄木もいふやうに永井荷風の事件は、同時にそれが非愛国思想のため摘発されたのであつた。ところで、啄木は荷風の「新帰朝者の日記」に對して、同感の点があるにも拘らず、非常なる嫌惡を感じている。それはこの文章が彼にとつて欧米心酔者の無責任な輕べつと嘲笑として受取られたからである。「日本人の多数が保持する道德形式に満足する能はざるは小生も同感なり：小生も嘗て日本に生れたるを以つて小生自身の最大の不幸なりと思惟したる時代ありき。然し乍ら我等は遂に日本人なり：漫然祖国を罵りたりとて畢竟何するものぞ。小生は日本の現状に満足せず、と同時に浅膚輕薄なる、いわゆる非愛國者の徒にも加担する能わず候。在來の倫理思想を排するものは一層深大なる倫理思想を有するものならざるべからず、而して現在の日本を愛する能わざるものは、また更に一層真に日本を愛するものならざるべからず：真に愛する能はずんば去るべきのみ、真面目に思想するものにとりては実に死活の問題たり。既に去る能はずんばよろしく先づその國を改善すべし、然り而して一國國民生活の改善は實に自己自身の生活の改善に初まらざるべからず」。

彼の新しい意味での個人主義とは、こうした意味のものである。それは日露戦争前後の平民社一派の愛國心の問題にも通じ、また、改良主義的な点から云つて、万朝報中心の理想团的な意識、または堺利彦の主張の線に、遅ればせながらつ

ながつてゐるものという事ができよう。とにかく啄木としては、いまや国家権力と個人との関連の仕方について、真剣にとりくみはじめていたのであり、これこそが将来の日本につながる個人の、全責任において考察されなければならない問題なのであつた。四十二年十二月の評論「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」は、かかる立場からの多方面に亘る感想である。「国家！国家！ 国家といふ問題は今の一部の人達の考へてゐるやうにそんな軽い問題であらうか：私にとつては国家について考へる事は同時に日本に居るべきか去るべきかといふ事を考へる事になつて来た。凡ての人はもつと突込んで考へなければならぬ。今日国家に服従している人は其服従している理由についてもつと突込まねばならぬ。又従来の国家思想について不満足な人も、其不満足な理由についてもつと突込まねばならぬ。」

## 八

しかし、こうした彼の主張も、それだけで直ちに彼自身の問題が解決するわけでないことは勿論であり、その実践のためには今一段その飛躍が要求される。しかしそれが彼には決意がつきかねていた。四十三年三月十三日の手紙の中で、彼は以上のような生活の統一について語つた後、「僕はそのために努めた。随分勤勉に努めた。そして終に今日の我等の人生に於て、生活を真に統一せんとすると、其結果は却つて生活の破壊になるといふ事を発見した」といい、人生は既にとうてい統一することの出来ぬほど複雑な支離滅裂のものであり、生活自体がワナであつて、所詮ここからのがれられぬと悟つた時、捨身になる事で却つて強くなつた事、そしてこの生活の中では「自覺的な二重生活」、自己一人の生活と家族や社交關係の生活を区別し、生活のワナにかかつたふりをして、自己を決して他人に見せぬ様にするという。この心境の意味は明確でないが、恐らく家族制度・社会制度及び政治経済等の、既成の制度からの離脱が考えられながら、しかもその自己の基礎を確信を以つて表白することのできない状態にあつたのであらう。六月十三日の書簡中に、「一人になりた

い」と云つており、「この希望は人間の抱き得る最も深い悲しい希望であると共に最も不可能な希望、そして全人類の負うてゐる運命と、今日まで作り來つた歴史とを根柢から覆す希望である」といつているところから見て、既成社会制度からの離脱と、明日への社会制度への転身との間におかれた彼の孤独感として理解できるのであるまいか。

そして、この六月十三日の手紙が書かれたころ、既に辛徳事件が新聞紙上に現われ、世上の注目をひいていた。四十四年、日記の補遺として記された四十三年中の重要記事の中に、「六月―辛徳秋水事件発覚し、予の思想に大変革ありたり」といい、更に「思想上に於て重なる年なりき。予はこの年に於て予の性格趣味傾向を統一すべき一鎖鑰を発見したり。社会主義問題これなり。予は特にこの問題について思考し読書し、談話するころ多かりき」という。この、彼の生活統一の鍵が社会主義に見出されたというのは、恐らく六月以後の事と考えられ、四十二年十月以後の生活の統一後、四十二年の「自覚された二重生活」を経過した直後、新しく統一の基盤が社会主義に求められたと見るべきであろう。ただ、四十二年十月の生活統一主義時代にも、新しい個人主義と併行して、北海道以来の社会主義についての彼の理解は、次第に深まつていた事は事実である。例えば百回通信の中で、英国の社会政策的予算の通過に關して、「世には社会主義とさへ云へば、直ちに眉をひそむる手合多く候。然し乍ら、現に立憲政体が国民の權利を認容したる以上、」其政策が国民の幸福のためのものであり、立憲国政治家は、社会主義思想の実行可能な部分を実行に移すことなくしては、政治の精神を見失うものであり、社会主義を恐怖することは、二十世紀の世の中に五十年前の攘夷論をくりかえす如くに愚の極みであるといつてゐる。また当時提出中の工場法案について、それが何ら新味のない行政警察法にすぎぬもので、失業労働者保護法を欠いていることを不満とし、政治とは、人類の生活の保護と改善に他ならず、「此傾向を最も端的に代表する者は、善意に所謂社会主義」であり、それは近世文明の思潮たる解放運動につながるものであるともいう。四十三年四月十二日の書簡で、彼自身の生活様式とその性格が労働者と同じである、といつてゐる点にも彼の意識のあり方がうかがわれ

る。そしてこういう意識のあり方と前述の「生活の統一」の問題とが、幸徳秋水事件を凝視する事によつて、彼に国家権力への批判を強めさせ、彼を社会主義者として成長させたものと考ええる事ができる。

この事件は秋水が六月一日に拘引されて、二日には既に記事止めとなり、社会主義者の捕縛、無政府党の陰謀と報ぜられ、その検挙された者の名は報ぜられたが、その事件の性質がほぼ明にされたのは、十一月十日、公判決定以後である。啄木は新聞記者としてその経過を知るに便宜があつたとはいへ、その詳細を知つたのは四十四年一月三日、この事件の弁護人平出修より、秋水の陳弁書を借りてよみ、一月二十六日、事件特別裁判一件書類を読んだ結果である。事件判決は既に一月十九日、死刑執行は同月二十四、五両日であつた。

而して、この経過の中で彼の事件に対する関心は大きく、八月に起草された「時代閉塞の現状」は、前述の「性急なる思想」の系統を引くものであるが、それよりも明確に国家の強権と個人の立場について語り、「明日への考察」という副題がついている。四十三年十月中には北海道で知つた西川光二郎との旧交を温め、社会主義に関する文献をよみ、四十四年一月四日の夜には、幸徳の獄中書を筆写し、この事件に対する社会の反響及び自己の感想を五月になつてまとめあげた。秋水が無政府主義者であつた関係上啄木もクロボトキン著「青年に訴ふ」や、クロボトキン自伝「革命家の思出」、「ロシヤの恐怖」などを讀んだり筆写している。しかもこのころ既に彼は腹膜炎に罹つており、四十四年二月四日から三月十五日まで入院、限院の後も病状は肺結核に進行しつつあり、妻節子や母も亦結核に犯されるという悲惨な状態に陥つてしまふのである。

## 九

以上のような現実の中で、彼はいかなる思想的反応を示すか。先づ彼は四十三年八月の「時代閉塞の現状」副題、強

権、純粹自然主義の最後及び明日への考察」の中で、自然主義に対する清算を試みた。自己主張としての自然主義の不徹底を反省し、自然主義の名によつて抵抗を試みていたと考えられている国家権力と個人との關係を、更に徹底的に究明し、從來純粹自然主義的な立場からなされて来た觀照的な態度をすてて、自己主張の欲求に対立する國家の欲求の実態を見極めよと主張する。明治三十年代の青年のもつデカダンの傾向や内面的苦悩や理想の喪失など、すべて自然主義によつてそれが人間の現実の姿と考えられ、ただそれだけが人間と考えられているのは誤りであり、事實は時代の閉塞、自己主張の欲求を圧殺する強権によつてひきおこされたものであることを知るべきである。青年たちは國家の問題について、父兄の手に一任して願ない。ここに啄木は明治國家の家長權的な絶対主義國家機構をかきつけている。それは彼が文學者という特權意識をすてることによつて、より強く感じ取られ、幸徳事件の経過の中で具體性を得て來たものであらう。「我々青年を圍繞する空氣は今やもう少しも流動しなくなつた。強権の勢力は普く國內に行亘つてゐる」という表現にしても、前述の荷風の著書の發禁事件、四十三年八月四日の頃の、文部省及内務省の訓令による、全國學校職員生徒にして、社會主義の名を口にしたものは解職放校すべしという事實、更に九月六日に記された、事件以後毎日十冊前後の書籍が發禁となり、全國の書店が臨検をうけ「社會」の名さえあれば「昆虫社會」の名の雜誌まで押えられるという空氣の中で吐かれていたのである。こうした時代の閉塞に対して彼は今や敵の存在を明確に意識するに至る。そしてこれに対して宣戰しなければならぬ、自然主義をすて、盲目的自己反逆と元祿時代への回顧をすて、明日への組織の考察のために立ち上らなければならないと彼はいうのである。

次に日記においては、四十三年中は詳細な記録が欠けているが、四十四年に入つて、一月三日から五日にかけて、平出修から借りた幸徳の陳并書を読み、これを書写し、幸徳の無罪を信じて、西郷にも似た犠牲的立場に同情した。一月十日にはクロポトキンの「青年に訴ふ」を読んだうたれ、翌日社會主義者丸谷に會つて「平民の中へゆきたい」と語り、翌十

二日詩作の上で同傾向の土岐哀果と面会の約束をし、翌日対面の席上、「樹木と果実」という雑誌を出版する事を約した。書簡に於ては、四十三年十月頃は男子の誕生と死亡、「一握の砂」の発刊に悲しみとよろこびが重なっているが、十一月二十九日には、友人の藤孫平に宛てた書簡の中に、社会主義に対する感想を求め、十二月二十一日の宮崎宛では書きたい著述として、現代の社会組織、政治組織、家族制度、教育制度をえぐるように批判し、現実主義者、保守思想家に対して、明日の問題を提起したいといい、また、第二十七議会という題の下で普選による議会政治の改革を主張したいという。更に十二月三十日、経済上の援助をうけている宮崎に対して会計報告をした後、「君は僕の歌集の評の中に、社会主義は夢だと書いてあつたが、少くとも僕にとつては、社会主義は夢ではない。必然の要求である」といい、養老資金の必要をいつている。四十円の収入で夫婦不足なく暮す田舎の生活を、四十三円の収入で五人暮しの彼のドン底生活に比べた上で、老人二人の負担を社会主義的に解決する必要を語っている。其処に彼の生活に対する不安が恐怖にまで至っていることが示されている。一月九日の瀬川深宛では、この年よつた両親に、一日でもいいから樂をさせたいといつて、現在の社会経済組織を破壊しなければならぬと信ずる事、長い間自分を社会主義者と呼ぶことをためらつたが、今ではもうためらわぬといつている。

## 一〇

ところで彼はいかなる内容を社会主義に考えていたのであろうか。彼は大逆事件そのものについては、「全く弁護の余地なきもののみならず、国民としては余りに破倫無道の拳」とし、客觀的に見てほとんど常識を失したる狂暴の沙汰であり、何等同情あるべからずといつている。（無題）しかし一面、一月十八日特別裁判宣告の日、二十四人の死刑の宣告の判決を知つて家に帰り、「日本は駄目だ」と考え、十九日国民新聞をよみながら涙を流して、「畜生、駄目だ」と叫んでい

る。そしてこの事件の關係書類を読んだり、整理したりして、二月十三日、社会主義者丸谷と談話中「我々はもう決心してもよい」と語っている。彼は平出を通じてこの事件の内容を他の人より正確に知り得た。その結果「あの事件は少くとも二つの事件を一所にしてあります。宮下太吉を首領とする管野、新村忠雄、古河力作の四人だけは明白に七十三条の罪に当たっていますが自余の者の企てはその性質において騒擾罪であり、然もそれが意志の発動だけで予備行為に入つてゐないから、まだ犯罪を構成してゐないのです。そしてこの両事件の間には何等正確なる連絡の証拠がないのです」と、二月六日、大島経男宛に云つてゐる。これらの彼の判断には平出の解釈が入つてゐると考へてよい。啄木は秋水のいわゆる直接行動なるものが、テロリストとしてではなく、ゼネストを意味するものである事も、秋水の獄中手記によつて知り、秋水がこの事件に直接的には無關係であると信じた。しかるに「国民の多数は勿論、警察官も裁判官も新聞記者も国会議員も、社会主義と無政府主義の区別すら知らず、」予審判決書にすらその無智が示され、社会主義の硬派を暴力主義暗殺主義と理解し、無政府主義者である幸徳の東京の一時占領の計画と、宮下ら四人の天皇暗殺の事件と、別に一人の皇太子暗殺事件とが一丸とされ、国内の無政府主義撲滅が謀られたものであるとする点に、彼は憤りを祭じ得なかつた。しかもこの立憲国としての恥ずべき行為に對しての欧米新聞・諸団体の抗議の前に、外務省や内務省を通じて海外新聞紙上に、判決以前既に有罪決定の形でこの事件の内容が発表されてしまふという、日本政府の卑屈さ、裁判手続の不正、政府の一切の新思想に対する圧迫等、すべてこの事件をめぐる附帯現象を通じて、日本の現状及び政治權力に對して憤りと失望を感じざるを得なかつた。彼の中にひそめられた反抗の精神は、今やこの国家の強權の前に「社会革命家」として成長せざるを得ず、その実践としてとり上げられたものが「樹木と果実」の計画であつた。四十四年一月二十二日、平出に對して彼はこの社会の現状をのべた後に、この雑誌の性質について、「僕は長い間、一院主義、普選主義、國際平和の雑誌を出したいと空想してゐました」という。しかしそれは現在の軍政府下では不可能なる故、「時代進展の思想を今後我々が、

或は又他の人が唱える時、それをすぐうけ入れることのできるような青年を、百人でも二百人でも養つて置く」という目的でこの雑誌をつくり、やがてはこの雑誌が社会主義の曙光となるようにしたいという。この点について二月六日の大島宛の手紙は今少しはつきりと、「次の時代、新しい社会というものに対する青年の思想を煽動」するのがこの雑誌の目的であり、発禁にならぬ程度でしよつちゆうマツチを擦つて青年の燃えやすい心に役けてやろうということですといつてゐる。そして二三年後には政治雑誌にして、一方何らかの実行運動、普選運動、婦人問題、ローマ字普及、労働組合はじめたいと思うという。

この計画は四十四年二月以後の、彼の入院生活と、土岐哀果との合議によつて中止されることになつたが、その後自宅で病床にあつてもいろいろな計画と思案がつづけられた。五月七日の日記には言論の自由のない日本に於て、新道德の基礎として「理性主義」という名の下に道德運動をおこすこと、或は岩手に歸つて「農民の友」という週刊新聞をおこす事なども考え、この間、平民新聞や社会主義文献をよみ、六月十五日から「呼子と口笛」の一群の長詩を書いている。「はてしなき議論の後」にはインテリゲンチヤの悩みと、彼の人民主義の志向が叫ばれ、「ココアの一匙」には言葉と行との、わがちがたい行動主義に立上り、われとわが体を敵に投げつける、テロリストの真剣な熱心な悲しみに共感を示し、「激論」には社会主義の理論と実行との対立を、亦、「墓碑銘」には一人の主義に忠実な機械工の、尊敬すべき姿を描くなど、当時の彼の社会主義に対する種々の角度からの心情が語られている。そしてこの心境で彼は四十五年四月十三日、二十八才でこの世を去つた。

## The State and the Individual in the Era of Meiji

Y. Nishio

Takuboku Ishikawa is not only a poet but also a thinker who devoted his life to the establishment of individualism. He is a follower of Tokoku Kitamura and Chogyu Takayama in his thought. He advocated Idealism and Romanticism in his former life. He strongly criticized ancient regime and old habits of life from that point of view. From the Russo-Japanese War he expected not a military victory but a chance for the rise of national

culture. But he lived in straitened circumstances. He taught in an elementary school, was a journalist and went to Hokkaido to live on ten yen a month. He always tried a small revolution to his circumstances. He gradually approached socialism. His way from individualism to socialism was full of contradictions. He could not help thinking that socialism was the best way for resisting the strong political power of the Meiji Government which oppressed national life. The Kotoku Shusui affair caused him to make up his mind. He died at 28 dreaming new plans for future Japan.